

史遊会通信

NO. 203
平成23年
11月8日
発行

事務局
03-3712
0651
下山田方

十月講演要旨

ナチス強制収容所における生と死

山本 鎮雄

ナチス強制収容所はドイツ全土と第二次世界大戦中のドイツ占領地域に二十ヶ所、それに付属する収容所一六五ヶ所があったと言われている（一九四四年三月現在）。そのうち、ユダヤ人虐殺のための絶滅収容所はポーランドに六ヶ所、最大の収容所はアウシュヴィッツである。

強制収容所全体の抑留者総数は五百万人、死者総数は四百万人、死亡率は八十パーセント、そのうちの多くはユダヤ人と言われているが、死者・生存者の実数は明らかではない。ナチス・ドイツの敗戦ですべての強制収容所は解放・解体された。

（一）強制収容所の見学

一九七五年晩秋、私はミュンヘンに滞在中、その近郊のダッハウ収容所を見学した。一九三三年三月、ダッハウはナチスがドイツ共産党、ドイツ社会民主党などのナチスに反対する政治指導者を「抵抗分子」（政治犯）として拘禁するための、最初に建設された収容所である。のちに建設された収容所のモデルである。

その後、収容所は予防拘禁として「常習的犯罪者」、ジプシー、浮浪者、売春婦、絶対平和主義者のエホバの証人、同性愛者、一般犯罪者を「反社会分子」と称し、対象を拡大して拘禁した。

例会のお知らせ

◎ 11月例会

日時 平成23年11月18日（金）

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第3研修室

講演 村上邦治氏

テーマ 古代出雲国筆頭

熊野大社の盛衰

自由執筆 今年感動した3冊の本

会員及び友の会員

字数 19字25行（題込）以内

締切 11月末日

◎ 12月忘年会

日時 平成23年12月7日（水）

午後6時～8時

会場 学士会館

会費 七千円

出欠のご返事は11月27日迄

自由執筆 高橋由貴彦・中山喬央・

村上邦治の諸氏

締切 12月20日

一九八七年の夏と秋の二回、旧東ベルリンの北方、ザクセンハウゼン収容所を見学した。ナチスがダッハウに続き「抵抗分子」

を拘禁するために開設し、ナチス強制収容所政策の総司令部を兼ね、戦争末期には収容者は五万人近くに達したと言う。

時期は前後するが、その年の五月、分割都市ベルリンは都市生誕七百五十年祭で種々のイベントが開催され、賑わっていた。ベルリンの壁に隣接する一角は、緩やかな傾斜地で建築物はなく、雑草で覆われていた。この一角は「テロの系譜」として企画され、土が掘り返され、地下室があらわになっていた。

一九三三年一月、ヒトラーが政権を掌握し、総選挙戦の最中に国会議事堂が放火炎上した。ナチスが放火に関与し、しかもドイツ共産党に濡れ衣を着せた。ヒトラー手兵の突撃隊や親衛隊の隊員、ゲシュタポがナチスに反対する共産党やドイツ社会民主党の幹部などを拘束した。

ナチス・ゲレンデと称されたその地は、ナチスが党勢の拡大とともに開設した事務所や警察署の地下室を利用し、そこに拘束した。その当時は強制収容所と言われている。

ないが、その後の暴力的な「テロの組織化」のルーツである。

(二) アウシュヴィッツ強制収容所

西ベルリン滞在中の一九八七年夏、ポーランドの首都ワルシャワを経由し、古都クラフスの郊外にある巨大なアウシュヴィッツ強制収容所を見学した。

私はこの現代史における負の遺産を目の当たりにして吐き気がして、目が眩み、激しい疲労感を覚えた。そのため、基幹収容所の第一収容所の歴史展示物と広大な絶滅収容所の第二収容所（ビルケナウ）の一部を見学して打ち上げた。

第一収容所は、一九三八年九月にドイツ軍がポーランドを占領した後、「抵抗分子」を収容するためにポーランド軍の兵舎を転用した。二十八棟のうち、餓死棟や銃殺のために弾丸が突き刺さっている「死の壁」が今でも印象に残る。

第二収容所は、ユダヤ系オーストリア人のフランクも過ごした「死の収容所」である。フランクは飢餓、過酷な労働、悲惨な現実を精神医学の視点から記録し、邦訳書『夜と霧』は読み継がれている。

ドイツとドイツ占領地域から貨物列車で移送された抑留者は、ラップ（積み下ろし場）で下ろされ、親衛隊将校によって二つの集団に「選別」された。その光景はスビルバーク監督作品『シンドラーのリスト』の場面である。

一つの集団は子ども、病人、身体障害者、妊産婦などで労働能力がないと見なされ、チクロンBでガス室で殺害され、死体は火葬された。もう一つの集団は労働力ありと見なされ、生き延びたが、過酷な待遇と労働を強制され、軍需工場などで餓死するまで徹底的に酷使された。規律に反すると、看視兵やカポによって撲殺されたり、絞首台に吊された。

強制収容所は刑務所と異なり、抑留者は「期限なき仮りの状態」である（フランク）。このような極限状況で、案に生きようと欲するなら、抑留者は看視兵か、労働班や収容棟などの班長、つまりカポとして看視兵の手先となり、抑留者を徹底的に管理することである。

(三) ナチス強制収容所の現実

アーリア人種の優越を説く人種論的民族

主義の教義により、突撃隊、親衛隊、ゲシュタポに不当に逮捕され、収容所に拘禁された抑留者は、生き延びるために自我を防御した。そのために自我の分裂を体験した。それを自覚したのは、少数の抑留者だった。

強制収容所に拘禁された精神医学者のコ―ヘンは「急性人格分裂症」と解釈した。

この症状はいずれ消失するが、抑留者は暴力的に虐待され、死の恐怖による「恐怖の神経症」が見られたが、極度の「死の恐怖」のために、この症状に特有な嘔吐、下痢、失神という肉体的反応は見られなかった。

（『強制収容所における人間行動』）

収容所の生存者は、長期の「自我の分裂」の結果、現実感や自我感を喪失する「離人症」に悩み、その後、情緒不安定、環境への不適応などの慢性的な精神障害に悩み、しかも不整脈、リウマチ、骨の退化、呼吸困難などの身体障害を病み、日常生活上の障害となった。

ユダヤ系オーストリア人で心理学者ベテルハイムは、収容所の機能の一つとして「親衛隊の非情教育の練兵場」を指摘している。収容所では抑留者を非人間的に処遇し、ドイツ人青年に反ユダヤ的人種主義の

現実を強烈に植えつけたからである（『鍛えられた心』）。それ以上に、収容所は「非情教育の屠殺場」となった。

抑留者は氏名、衣類・所持品の一切を剥奪され、拘禁理由・人種・国籍によって色別に分類され、登録番号を記された三角形の布製のワッペンを渡され、上着などに縫いつけた。しかも抑留者の上腕に登録番号を彫りつけた。それは抑留者の人格を根底から放棄させ、効率的に管理するためにおこなわれた。

少数の監視兵が多数の抑留者を酷しく管理する最も有効な手段は、抑留者に屈辱と恐怖を実感させることである。しかもナチスの人種論によって、その頂点にドイツ人、末端にユダヤ系ポーランド人を位置づけ、厳格なヒエラルヒーを構築して支配することである。

生き延びることを最優先する抑留者にたいして、監視兵は抑留者相互に憎悪と反感、抗争と対立を煽動し、意思の疎通や結束を組織的・暴力的に妨害した。その手先が各部署に配置された抑留者の班長のカポである。カポは気に入る仲間を補佐に指名し、気に入らない抑留者を排斥した。カポはド

イツ人の常習犯罪者や一般犯罪者が選ばれ、監視兵よりもはるかに抑留者を酷しく虐待した。フランクフルトによれば、カポは栄養に富み、飢餓に苦しむ抑留者にたいして過酷な労働を平然と指揮した。

アウシュヴィッツ収容所所長ルドルフ・ヘスは、抑留者を「分割し、統治する」方法とカポのポストをめぐる過酷な権力闘争が収容所の管理を容易にしたと回想している（『アウシュヴィッツ収容所』）。

反共主義のナチスの最大のスローガンはソ連のボルシェビズムの打倒である。独ソ戦では、スターリンググラードの戦いで形勢は逆転した。ドイツ軍は収容所の若い監視兵を劣勢の東部戦線に大量に派兵した。その結果、収容所の監視体制は手薄になった。だが、抑留者は決死の覚悟で抵抗し、自ら解放することはなかった。それはカポによる「自主管理」が徹底したからである。カポが生存する比率は高い。しかしナチスの犯罪裁判では、監視兵とともにカポもまた裁かれた。

（四）過去に目を閉ざす者は
化学者のユダヤ系イタリア人のレーヴィ

は、アウシュヴィッツ収容所Ⅲから奇跡的に救出された。レーヴィは収容所体験を回顧して「ほとんどあらゆる国に監獄、少年院、精神病院といった、アウシュヴィッツと同様の、人間から名前、尊厳、希望を奪う施設が存在する。そして何よりもファシズムはまだ死に絶えてはいない。ある国ではより強化され、また別の国では虎視眈々と復讐を狙っている」と指摘している。
 (『ファシズムはまだ死に絶えていない』)
 なぜなら、「人間」の自由と平等を政治

的に抑圧する国家体制は、それを貫徹するために、特定の社会層を強制的に拘禁する隔離施設を創出するからである。アウシュヴィッツこそその典型である。
 ドイツの元大統領ヴァイツェッカーは、ドイツ敗戦四十周年の一九八五年、『荒野の四十年』と題してドイツ連邦議会で演説した。彼は、国民にドイツ敗戦の五月八日こそ誠実かつ純粋に心を刻むための日であると、呼びかけた。
 その際、問題なのは「過去を克服する」

ことではない。「過去に目を閉ざす者は、結局のところ、現在にも目を閉ざすことになる。非人間的な行為を心に刻もうとしないうちは、またそうした危険に陥りやすい」からである。ヴァイツェッカーはドイツ戦争犯罪を明確に認めた。氏の演説は高潔な倫理性と敬虔な宗教性によって、世界的に賞賛された。

いまだにアウシュヴィッツが終わっていない現在、その過去を心に刻むことは、何よりも大切なことである。

自由執筆

黒船物語 (二)

―世界情勢と幕末―

(続アメリカ合衆国編)

(友の会) 由利 潤一

ペリーの乗艦ミシシッピー号(一七〇〇トン)は一八五二年(嘉永五年)十一月二十四日アメリカ大西洋岸のノーフォークを出発した。同艦は直接太平洋に向かわずに、マデイラ、セントヘレナ、喜望峯、セイロン、シンガポール(三月二十五日)を経て

日本に向かった。香港で他の僚艦と合流し、上海でミシシッピー号から旗艦サスケハナ号に乗り換え、四隻の艦隊は五月二十三日に上海を出発し同二十三日沖繩の那覇に入った。この後小笠原諸島を調査した上、貯炭所の土地を購入している。一八五三年七月に那覇を出て日本に向かった。艦隊が浦賀についたのは一八五三年七月八日であった。

幕府はアメリカが強い決意で開国を迫ってくるとは知らず、国法の鎖国を楯に交渉を拒もうとしたが、結局国書を受け取り、

翌年のペリー再来を承諾して開国への道をとる。アメリカは、オランダを介して徳川将軍が死去したので再来を延期して欲しいという幕府からの申し入れにもかかわらず、一八五四年(安政元年)一月には今度は九隻の軍艦からなる艦隊で江戸湾に姿を現す。これはペリーの後すぐにロシアのプチャーチンが長崎に来ており、英仏も何時日本に現れるかわからないので、何としても早く日本との間で開国条約を結びたかったからである。

ペリーは、来航に当たって出来るだけ多

く日本についての情報を集め、シーボルトの日本についての著書や、日本の地図のコピーなども入手して研究していたが、シーボルト自身についてはロシアと親しい関係がある人物としてみていた。

ペリーは幕府官僚との交渉に当たっては高圧的になるべきだと考えていたようで、交渉の場所を江戸に近いところを選び、終始強い態度をとりつけ、加えてその圧倒的な武力を誇示して圧力をかけた。

その結果三月に幕府は神奈川でペリーとの間で日米和親条約に調印した。さらに、アメリカは領事ハリスを下田に一八五六年（安政三年）に着任させ、交渉を進めたことで、一八五八年（安政六年）日本と初めての日米修好通商条約の締結に成功する。

この条約はその後、安政五ヶ国条約として、アメリカ以外にも日蘭、日露、日英、日仏にも適用されるが、欧米側にだけ有利な最惠国待遇、天津条約で清国に押し付けられたのと同じような関税条項などを含む不平等条約であり、後に明治政府がその改正に努力しなければなくなる。また勅許を得ないで外国と結ばれたということで、国内的にも大きな問題になった。

万延元年（一八六〇年）一月、幕府は、日米修好通商条約批准書交換のため、新見正興を正使、村垣範正を副使、小栗忠順を目付けとする最初の遣外使節団を訪米させた。使節団はアメリカ軍艦ポーハタン号でパナマへ送られ、ここでパナマ地峡を汽車で大西洋岸に出て船を乗り換えワシントンへ着いた。帰途は大西洋、インド洋を経て帰国。日本人として初めて世界一周をしたことになる。この使節の渡米に際し、別に威臨丸がサンフランシスコまで派遣され、日本人による太平洋横断航海を達成し帰国した。

一八六一年には南北戦争が始まったため、アメリカは余裕がなくなり、それからは英仏両国が幕末の政治に大きく影響することになる。南北戦争（American Civil War）が終わると武器、艦船など多量の余剰軍事物資が生じ、銃器、弾薬などが武器商人らの手で多く日本に流入し、ガットリングガンのような新兵器が長岡藩によって購入されたこともある。幕府が購入した甲鉄艦（旧南軍がフランスで建造したストーンウォール号）が、横浜に到着した時点でアメリカの中立政策により引渡しを拒否され、

後に新政府に引き渡された。これらの武器は戊辰戦争で用いられた。

アメリカは十九世紀後半になるが、その頃まだカメハメハ大王が統一した独立王国であったハワイで、リリウオカラニ女王を退位させ、ドールらが一八九四年共和国政府を組織し、一八九八年に米領とした。

スペインとの間では、一八九八年キューバのハバナ港に停泊していたアメリカの軍艦「メイン号」が原因不明の爆発で沈没したことから米西戦争が勃発。キューバで勝利し、また太平洋ではアメリカ海軍がマニラでスペイン海軍を壊滅させた。その後アメリカはパリ条約で、キューバを保護国化しプエルトリコ、フィリピン、グアムをスペインから獲得した。

アメリカ合衆国の領土拡大

一七六三年 東部十三州イギリスより独立
一七九三年 フロリダをスペインから購入
一八〇三年 ルイジアナをフランスから購入

入

一八一二年 英米戦争
一八四五年 テキサス共和国独立
一八四六年 テキサスのアメリカへの併合

から米墨戦争起こる

一八四八年 ニューメキシコ、カリフォル

ニアをメキシコに割譲させ、

併合

一八六七年 ロシアからアラスカを購入

一八九八年 ハワイをアメリカ領とする

一八九八年 米西戦争勃発、フィリッピン、

グアム、プエルトリコなどを

獲得

当時のアメリカの大統領

12代 テーラー ホイッグ党

13代 フィルモア ホイッグ党

14代 ピアース 民主党

15代 ブキヤナン 民主党

16代 リンカーン 共和党

17代 ジョンソン 共和党

18代 グラント 共和党

(1869—1877)

自由執筆

空母・エンタープライズに

挑んだカツオ船

瀧澤 中

巨大空母、「エンタープライズ」「ホー

ネット」、そして巡洋艦五隻、駆逐艦七隻

の大機動部隊。率いるは、ウィリアム・ハ

ルゼー提督。「ブル（猛牛）・ハルゼー」

のあだ名通り、その戦いぶりはすさまじか

った。そんなブル・ハルゼーが、昭和一七

年四月、東京空襲を企図しこの機動部隊を

率いて日本に近づいていた。

ドゥリットル爆撃隊。

空襲を成功させるためには、発艦前に日

本にバレてはいけない。当時はまだ、連合

艦隊とその航空部隊は米海軍を圧していた

からである。

秘密裏に日本に近づいて爆撃機を飛ばす、

航行は慎重を期した。爆撃隊発艦予定地点

にはまだだいぶ距離がある。その時。

「小型漁船らしきもの、電波を発して航行

中」

「なにッ」

日本側に気付かれたら、東京空襲はでき

ない。企図を隠すためにこれを撃沈せねば

ならない。

「ただちに攻撃せよ！」

第二三日東丸。カツオ船、否、連合艦隊

所属の特設監視艇は、こうして撃沈された。

ドゥリットル爆撃隊は日本近海で空母を

離れ、日本を爆撃して中国に着陸する。

爆撃隊を出撃させて、ハルゼー機動部隊

は帰途についた。と、

「小型漁船らしきもの、電波を発して航行

中」

「なにッ。またか」

再びハルゼーは攻撃を命じた。ここで日

本の機動部隊に見つかったら、勝てない。

今度もやはりカツオ船、否、元カツオ船

の長渡丸。歴とした連合艦隊所属の特設監

視艇である。ハルゼー機動部隊は、最初は

艦砲で攻撃したが、射撃がへたくそなので

当たらない。否、的が小さすぎるのか？？

次はなんと、艦上攻撃機が漁船、否、特

設監視艇を襲う！

空母も一発で沈め得る艦上爆撃機の猛攻。

「くそう、これじゃかなわん」

長渡丸では、全員無我夢中である。

「よしッ、向こうがその気なら、やってやろうじゃないか！」

なんと艇長は、カツオ船、もとい、連合艦隊所屬・特設監視艇で敵機動部隊に突入を決意。船員たちも、(どうせ死ぬなら)という気持ちで、異議は無い。

全長二五〇m、排水量二万七の空母「エントープライズ」に、全長一〇m、排水量百七の元カツオ船が挑む！

長渡丸の主要兵器は、強力な(?)小銃二丁と七・七ミリ機銃一丁！

自由執筆

御 寮 法 性 墓

柴田 弘武

本誌189号に、平山さんが「松虫寺伝説」をお書きになっている。この伝説は幕末の赤松宗旦の『利根川図志』にも「松虫皇女墓」の項で取り上げられている。今回はそのひそみに倣って、同『図志』に載る「御寮法性墓」を取り上げてみたい。

同書は「青山村の東都部村大籠山正泉寺

「最大船速！突撃ッ！」

びっくりしたのは、ハルゼー機動部隊である。

「提督、漁船が、こちらに突っ込んできます！」

「お前ら、一体何をしているんだッ。さっさと屠れ！」

小さな元カツオ漁船に、信じられない数の砲弾が浴びせられる。いくら射撃がヘタでも、これだけ撃てば、当たらぬ方がどうかしている。

船員たちのお葬式はすみ、お墓も建てられた。

が。なんと、彼らは生きて捕虜になっていた。長渡丸は、半分しか沈まなかった。

ちなみにドウリットル爆撃隊は、特設監視艇に発見されたため発艦を急がせた。そのため着陸予定の中国に夜間到着し、ほとんどが不時着となって五名死亡八名が捕虜となった。

(禪宗、本尊地藏菩薩)の後に在り。五輪の石塔なり。法性は最明寺時頼の女にて、この寺を建立し、命けて法性寺といふ。」と始まるのであるが、その話はちょっとわかりにくい。そこで寺の縁起を紹介したい。「創立は鎌倉時代の弘長三年(一二六三)執権北条時頼の娘桐姫(法性尼)の開基と伝えられる。しかし法性尼永眠後一五三年を経て応永二十四年(一四一七)、法性寺檀家孫右衛門の娘おとりが法性尼の霊にとりつかれ、下半身が真赤になる奇病を発し、法性寺住持に『生前の悪行による報いと、

女身による汚血不浄のために蛇身に堕ちて手賀沼の底に沈み、血の池地獄の苦しみを受けている。和尚の法力により血盆経を授けて救ってほしい』と告げた。住持が本尊地藏菩薩尊の尊像に村人とともに祈念すると、夢枕に地藏尊の化身が現れ、『明朝手賀沼にゆけ、竜宮に蔵する血盆経を汝に与えん。』と伝え消え去った。翌朝手賀沼に行ってみると、湖面がにわかにも揺揺し、白蓮花一本が湧出して、中に血盆経一巻があった。住持がこれを持ち帰り、娘おとりと法性尼のために手あつく供養したところ、

娘の病も平癒し法性尼も血の池地獄より救われ成仏したという。』(注：血盆経は女人救済の経という。)

『利根川図志』ではおとりの名はなく、法性尼自身の奇瑞とされている。

なお経典の一部が湧出したことからこの辺りを都部と呼ぶようになったといい、湖水が龍の如く吹き上がったことにより法性寺を大龍山正泉寺と改めたとされる。また法性尼については、執権北条時頼と讃岐局を両親として(年代が合わないのであるが)寛元四年(一二四六)に生まれ、十七歳のとき奇病を発し、弘長三年に法性寺を開基したとされる。いっぽう法性尼が亡くなったので父時頼がその菩提を弔うために寺を建てたという伝承もある。「縁起」はさまざまな伝承をもとに江戸中期頃書かれたものである。

ところで鎌倉史の正史である『吾妻鏡』に奇妙な記事がある。それは文応元年(一二六〇)十月十五日と同年十一月二十七日の記事である。以下引用しよう。

「十月十五日 己酉 相州(北条政村)の息女邪氣を煩ひ、今夕殊に騒乱す。比企判官(能員)の娘讃岐局が霊崇りをなすの由、

自託に及ぶ。件の局大蛇となりて頂に大きな角あり、火災の如く、常に苦を受く。当時比企谷の土中にあるの由、言を発す。これを聞く人、身の毛堅つと云々。」

「十一月二十七日 今日相州 一日経を頓写せらる。これ息女邪氣に悩むは、比企判官能員が女子の霊託による。かの苦患を資けんがためなり。夜に入りて供養の儀あり。若宮別当僧正を請じて唱導となし、説法の最中、件の姫君騒乱し、舌を出し唇を舐め、身を動かし足を延ぶ。ひとへに蛇身の出現したるに似たり。聴聞のために霊氣来臨するの由と云々。僧正加持せしむるの後、惘然として言を止め、眠るがごとくにして復本すと云々。」(注：自託＝霊の乗り移った者が、自身の口から霊神などの言葉を託宣すること)

文応元年は時頼が亡くなる三年前、執権職を長時に譲って出家し、最明寺入道了房道崇と名乗って、いわゆる得宗専制政治を敷いていた時である。政村は時頼の大叔父に当たり、執権時頼のとき引付衆一番頭人となつて時頼を助けた人物である。文応元年は政村五十六歳にあたる。

ところでその娘(名前は記されていない)

に取り憑いたのが比企判官能員の娘である讃岐局であつた。能員には別の娘若狭局があり、頼家に嫁して一幡を生み、やがて北条氏を凌ぐ勢いを見せ始める。そのことに危機感を抱いた北条氏は建仁三年(一二〇三)に比企一族を亡ぼした。比企氏の亡霊が北条氏に祟る要因は間違いなく存在するのである。

さてこの話は正泉寺縁起と似ていないだろうか。法性尼の母親は讃岐局とされており、蛇身に堕ちて苦悶し、高僧の加持で救われるという点などである。

ここからは私の推理であるが、時頼の娘が若くして不治の病(ハンセン氏病か結核)に罹り、時頼は娘(桐姫)を人目から遠ざけるため鎌倉から離れた土地で、信頼の置ける人物にその身を預けたのではないだろうか。当時下総国相馬郡のこの地は、相馬胤綱の妻尼御前の領有する黒崎郷内の発土村と呼ばれていた。そこで時頼は尼御前に村の一部を提供させ、そこに寺を建て、その寺が桐姫の面倒をみる。その費用はその一部(村)の年貢でまかなうというようなことがあつたのではなからうか。桐姫は気の毒にも寺ができて間もなく死亡し、その

墓として五輪塔が寺の脇に造立された。その後時代が変わり足利氏の時代になると寺も荒廃し、その五輪塔もいつしか土中に埋もれてしまった。

しかし応永年間になり奇特なお坊さんが寺を復活し、名も正泉寺と改め、血盆経出現道場として世に広めるために、『吾妻鏡』の讃岐局の話を利用して縁起を作ったのではなからうか。

五輪塔は寺の再興時に発掘され、いまも寺の脇に古風な佇まいを見せている。

自由執筆

律令国名の発音と邪馬台国

新井 宏

相模原市に四十年以上住んでいるので、なぜ相模をサガミと読むのか気にしていた。漢音ならシュウボであり、呉音ならソウモである。似ているところもあるが、とても「サガミ」とは発音できない。だからと言って、古語辞典にも説明がないし、訓読みにも思い当たる語がない。

そもそも律令制の国名表示は、和銅六年（七一三）に元明天皇が国や郡の名に好字を二字つけるように命じたことが始まりである。もちろん、それまでも武蔵を尤邪志と記したように、同音の地名があったに違いないが、相模については不明であった。

ところが、現代の韓国語で「相模」を読むと「sa-mo-yo」となり、「サガミ」に近い発音なのである。『日本書紀』の天智五年（六六六）に「百濟人男女二千余人東国移住」とあるように、南関東は百濟人の入植地であり、後には高麗郡も置かれている。そんなことを考えなくとも、古代の漢字音に朝鮮半島の影響があったことは、いまや常識であり、私の推論もトンチンカンとは思えない。

そんなことを考えている内に、東日本の発音は想像以上に韓国語に近かったのではないかと思ひ始めた。

それは「東北弁」には、韓国語にあって日本語にない発音が存在しているからである。

昔、落語で東北弁を茶化して、「新宿・渋谷・品川方面」を「スンズク・スプヤ・スナガワ方面」と言っていた。すなわち、

イ行をウ行で発音すると東北弁らしくなるのである。「新聞・寿司・雑誌」を「スンブン・スス・ザッス」と発音するのも同様である。

日本語は五母音であるが、韓国語には八母音あり、イとウの発音の他に、その中間的な発音（唇を平たくして発音するウ）が存在している。それが東北弁には顕著にみられるのである。

そう言えば、昔の日本語は八母音であったという。いわゆる上代特殊仮名遣いであり、「イ行」と「エ行」と「オ行」に甲と乙の二種類の発音があり、万葉集などでは漢字借音によって厳密にかき分けていたというのである。もっとも最近の学説では、七母音説とか五母音説とかが優勢で、むやみに八母音説を持ち出すわけには行かないが、東北弁のイとウの中間の発音を上代特殊仮名遣いにあてはめるなら、「イ行」の乙音となる。

越路吹雪の「愛の賛歌」を聴いていると「燃ゆるくちづけを」の「る」を「歯を食いしばって」発音している。これが越後弁特有の「ウ行音」であり、新潟に疎開した経験のある私は、簡単に新潟出身

者を見分ける。これもイとウの中間的な発音なのである。

もつとも、標準日本語でも、スとセの母音だけが、通常の唇を丸めたウの発音ではなく、唇を平たくしたイ音に近いウの発音となっている。

もうひとつ韓国語との対比で、気になるのは「濁音」である。韓国語では、語頭に濁音が無いが、語中では逆に濁音となる。韓国人は「どこへ行く」と言う発音ができず「とこへ行く」と言う。その一方で、「讃岐うどん」の発音がでずに「サヌギうどん」という。

この法則は一部で日本語にも見られることであり、和歌の世界では、かなに濁音を振らなくとも問題なく詠めた。

祝出版

三戸岡道夫著

ビジネス短編小説集

『ソクラクレス』

栄光出版社

そんなことを考えている内に、古代の国名や地名に「語中濁音」が多いのに気がついた。吾妻、安曇をはじめとして、長門、吉備、出雲、因幡、但馬、丹波、淡路、和泉、伊賀、伊豆、駿河、相模、飛騨、加賀、佐渡、上総、多賀など二音目に濁音がくる例が非常に多いのである。

ところが、九州・四国には濁音のつく律令国が見当たらない。熊襲をはじめとして、筑紫、豊、肥、日向（ヒムカ）、大隅、薩摩、吉岐、対馬、阿波、讃岐、伊予、土佐などである。金印の出た「志賀の島」もシガではなくシカであるし、邪馬台国に比されることの多い日田もヒタと濁らない。宇佐もその例になるであろうか。

そのような現象は、魏志倭人伝にも関係しているかも知れない。魏志倭人伝に出てくる人名や職名や三十余の国名にも濁音が極めて少ないのである。

もちろん、魏志倭人伝の表記の読み方などわかっていないわけではないが、通説に従うかぎり、濁音は見られない。たとえば、比較的安定した読みとなっている卑弥呼（ヒミコ）、卑弥弓呼（ヒミココ）、台与（トヨ）、卑狗（ヒコ）、爾支（ニキ）、

卑奴母離（ヒナモリ）、弥弥那利（ミミナリ）、狗古智卑狗（ククチヒコ）、不弥（フミ）、対馬（ツシマ）、末盧（マツロ）伊都（イツ）、邪馬台（ヤマタイ）などには濁音がないのである。

もしかしたら、卑弥呼の住む邪馬台国地域には濁音が少なかったのではないか。逆にいえば、九州以外の日本海側や関東地方、東北地方などでは、韓国式に語中で濁る発音が多かったのではないか。

もし、こんな仮説が成り立てば、邪馬台国は九州にあったことになる。

事務局だより

※例会日の記憶違いが多いようです。お間違えのないよう確認してください。

一月からは元のとおり、第四水曜日の夜になる予定です。

※十二月七日（水）は恒例の忘年会です。今年の締めくくりの会にぜひご出席ください。出欠のご返事は十一月二十七日迄に事務局へお願いします。会費は会場にて徴収します。